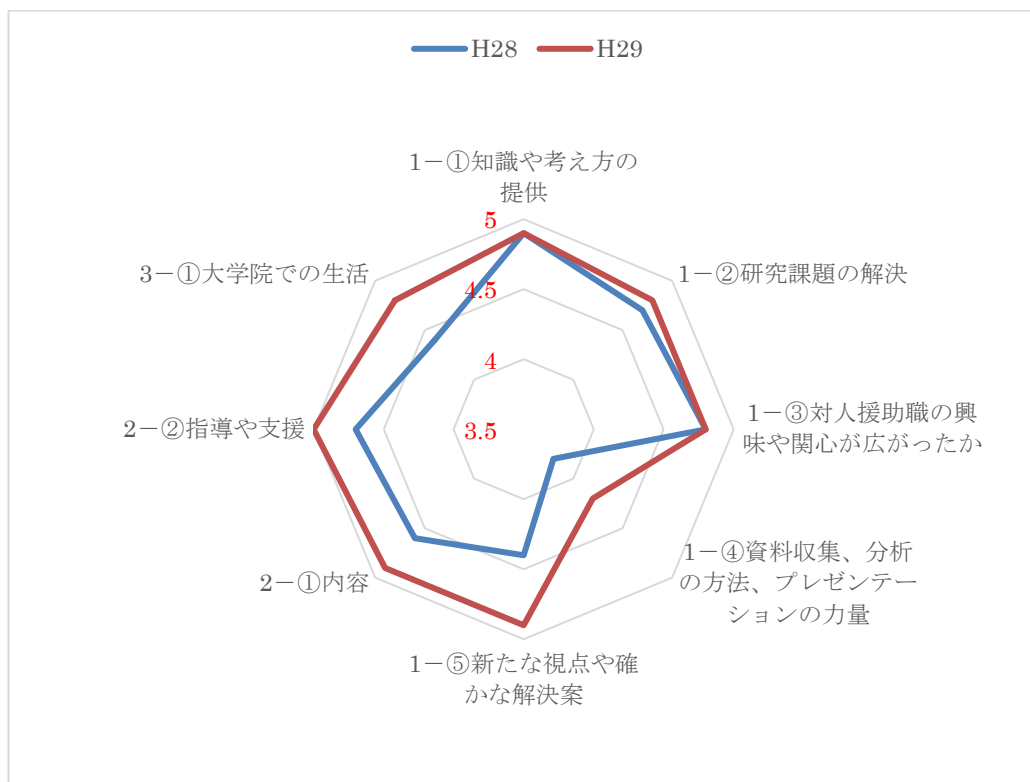


武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科 平成 29 年度修了生アンケート結果（修士 13 名、博士 3 名）※
（平成 30 年 3 月実施）

大問	小問	平均値※		評価の具体的内容	改善の方法
		H28	H29		
1 学修について	①新たな知識や考え方を提供したか。	4.9	4.9	臨床での問題を考えるための概念が広がった。 固まっていた視野が広がり、多角的な考えができるようになった。 研究の方法や視点について客観的な視点を持つことや、先行研究とその研究の立ち位置などについて考えをもてるようになった。	教育・心理・福祉と援助に関わる3つの分野から、各自のテーマの探究に適した多角的な提言ができるように努めます。
	②専門分野の問題や研究課題の解決に活用できたか。	4.7	4.8	教育の課題が福祉の充実によって解決できる可能性を見出すことができた。 課題のある学生への接し方について学修したことが活かされた。 研究は、課題の立て方が問題であることが分かった。	援助の困難性にとどめるのではなく、そこに含まれている科学的・社会的課題に迫る学修ができるように支援したいと思っています。
	③対人援助職の広範な取り組みに興味や関心が広がったか。	4.8	4.8	他職種の人と知り合い、さらに福祉の面で興味・関心が広がった。教育面でも府県により色々違いがあることなどを知り、興味が広がった。 心理や福祉分野をもっと知りたいと思った。	選択科目の単位数は分野別に規定していませんが、できるだけ分野を越えて受講するように促したいと思います。
	④アンケートや聴きとり、資料収集などの方法やその読み解き、分析の方法、さらにプレゼンテーションの力量はついたか。	3.8	4.2	プレゼンテーション、インタビュー等の力はついた。 聞き取りについては学ぶことが多かった。分析の方法などについては、今後さらに学ぶ必要があると感じている。 資料収集やインタビューの方法、課題の見つけ方が分かった。	分析の方法も、研究目的や内容によって異なってきます。研究それぞれに応じた研究・分析方法をともに考えていくことを大事にしていきたいと思っています。
	⑤現場で生じる様々な課題や問題についての新たな視点や確かな解決案が考えられたか。	4.4	4.9	女性高齢者と教育(子ども)課題を結び付けて、高齢者問題の解決の糸口を提案していきたい。 教育現場における成果の考え方、成績以外の評価について考えることができた。	表象する事実(姿や語りなど)とともに、それをどう読みとるかという援助者側の力量・変容についても、本研究科では併せて研究対象とできればと考えています。
2 授業や研究指導について	①充実した内容だったか。改善すべき点は何か。	4.6	4.9	先生や同期と臨床で起きていることをディスカッションし、問題共有できたことや、解決に役立ったことが印象に残った。 福祉や心理の視点から教育について考えることができた。	ゼミでの教員・院生の討論が、研究内容の質を高め、研究方法を精緻なものにします。特に人びとを対象とする調査では、崇高な研究倫理が求められ、これを担保するには研究方法、論文叙述についての討論がいつそう重要となると考えます。
	②研究に対する指導教員の指導やゼミの院生の支援は、充実していたか。改善すべき点は何か。	4.7	5.0	授業時間以外にも多くの時間をさいて研究指導をしてもらった。また、関連する文献について様々な情報を提供していただいた。 問題についての基本的な考え方や研究への提起について指摘をもらい、今後の研究につながる指導を受けることができた。 仕事との両立は大変だったが、少しずつ環境に慣れていくと、切り替えることができ、とても楽しかった。思い出はたくさんある。	院生のみなさんの課題や研究テーマは、教員の研究領域と異なる場合がほとんどです。教員も院生の研究内容に接し、その分野の学習や研究をともに探究する姿勢でいます。
3 院生生活について	①大学院での生活(授業や研究の環境も含め)は、充実していたか。改善すべき点は何か。	4.4	4.8	教育・心理・福祉と多面的に学ぶことができて良かった。 パソコン室など自由に学習できる環境であった。 これまで教えることばかりだったので、学ぶ楽しさを十分に味わえたこと	情報処理室の使用を、学生証での入退室管理とすることで、入室日や使用時間の弾力化をはかってきました。さらに自由に利用できるように改善していきます。

※ 修士修了生 16 名。1 名は修了式を欠席のため 15 名に配布し、13 名から回収した(回収率 86.7%)。博士修了生は 3 名で全員に配布し全員から回収した。

※ 1～5 の 5 段階評価で、5 が最も高い評価



大学院生活についての自由記述（一部抜粋）

- ・ 教育・心理・福祉と多面的に学ぶことが出来て良かった。
- ・ パソコン室など自由に学習できる環境であった。
- ・ 寝ないでレポートを仕上げたこと。過去の大学時代以上に学び書いたことがともしんどかったけれど、それ以上に充実していて、楽しい思い出となっている。
- ・ 学ぶことの楽しさ、人との出会いの大切さをさらに実感することとなった。そして、この思い（学ぶことは楽しいという事）を誰かに伝えていかねば！という使命感が生まれた。
- ・ 仕事との両立は大変だったが、少しずつ環境に慣れていくと、切り替えることができ、とても楽しかった。思い出はたくさんある。
- ・ 同期生との出会いは非常に貴重な出会いとなり、また他学年との交流においても学ぶことが多くあった。ゼミ、実地研修、交流会等、楽しく参加させていただいた。
- ・ 様々な立場の方と出会えたことが一番だと思っている。

学生評価に対する研究科としてのコメント

今回のアンケートによる学生生活評価では、修士課程修了生 16 名、博士後期課程修了生 3 名、計 19 名から回答をいただきました。全体としては満足度が高く、5 段階評価で全て 4 以上の評価をいただきました。修士課程では、夜間 2 年間という限られた時間の中で、ここ数年方法論に関する授業の強化を進めてきました。その結果、平成 28 年度の評価で比較的评价の低かった「現場で生じる様々な課題や問題についての新たな視点や確かな解決案が考えられたか」や「資料収集などの方法とその読み解き、分析方法、プレゼンテーション力」の設問においても評価は高まってまいりました。しかしながら、全体で見ますと、他の項目に比して評価は低く、期待に沿えるよう授業内容の改善に努めてゆきたいと思っております。プレゼンテーション力につきましては、修士中間発表や博士後期課程全体特研などに参加することにより、自らの経験を深めていただくようにしています、これについてもさらに検討をしたいと思います。

社会人を中心とした本研究科が期待している、他職種との交流とそれによる関心の広がりについては、高い満足度が得られており、このディプロマ・ポリシーは達成されていると考えています。

今後も、これら修了生、現役院生の意見を参考として、研究科の教育・研究指導をさらに向上させてまいります。

臨床教育学研究科 自己評価委員会
(2018 年 4 月)